第34回

福岡アジア文化賞

FUKUOKA PRIZE 2024

報告書

大賞
真鍋 大度
アーティスト、
プログラマー、DJ

芸術・文化賞
キムスージャ
アーティスト

学術研究賞
スニール・アムリス
歴史学者

Asian Party

アジアンパーティは、「アジアと創る」をコンセプトに、
アジアのヒト、モノ、情報が集う社交場をイメージし、今年で12回目を迎えました。
令和6年度は、民間企業・団体等とも連携してThe Creatorsや
福岡アジア美術館ベストコレクションⅡ、ミュージックマンス、
ART FAIR ASIA FUKUOKA 2024など、様々なイベントを全32事業実施しました。

The Creators

アジア美術館ベストコレクションⅡ会場風景（撮影：長野聡史）

ART FAIR ASIA FUKUOKA 2024

Sing!HAKATA

発行／2025年1月　福岡アジア文化賞委員会
〒810-8620　福岡市中央区天神1-8-1　福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930　FAX 092-735-4130
E-mail　f.prize@io.ocn.ne.jp　HP　https://fukuoka-prize.org/

主催　福岡市、（公財）福岡よかトピア国際交流財団
後援　外務省、文化庁

福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞　= 大賞　= 学術研究賞　= 芸術・文化賞

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）
- 第27回 ヤスミーン・ラリ（建築家・建築史家・人道支援活動家）

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第9回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）
- 第23回 ヴァンダナ・シヴァ（環境哲学者）
- 第24回 ナリニ・マラニ（アーティスト）
- 第26回 ラーマチャンドラ・グハ（歴史学者・社会学者）
- 第27回 A.R.ラフマーン（作曲家・作詞家・歌手）
- 第29回 ティージャン・バーイー（パンダワーニー奏者）
- 第31回 パラグミ・サイナート（ジャーナリスト）

アジア以外の国・地域

英国
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）
- 第28回 クリス・ベーカー（歴史学者）
- 第32回 タイモン・スクリーチ（美術史家）

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

オーストラリア
- 第5回 王 賡 武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）
- 第24回 テッサ・モーリス＝スズキ（アジア地域研究者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

ドイツ
- 第22回 ニールズ・グッチョウ（建築史家・修復建築家）

オランダ
- 第30回 レオナルド・ブリュッセイ（歴史学者[東南アジア史専門家]）

米国
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオ・アーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）
- 第25回 エズラ・F・ヴォーゲル（社会学者）
- 第32回 シャジア・シカンダー（アーティスト）
- 第33回 カターリヤ・ウム（政治学者・東南アジア研究者）
- 第34回 スニール・アムリス（歴史学者）

第 34 回学術研究賞
スニール・アムリス

中国
- 第1回 巴 金（作家）
- 第4回 費 孝 通（社会学・人類学者）
- 第7回 王 仲 殊（考古学者）
- 第13回 張 芸 謀（映画監督）
- 第14回 徐 冰（アーティスト）
- 第15回 厲 以 寧（経済学者）
- 第17回 莫 言（作家）
- 第20回 蔡 國 強（現代美術家）
- 第28回 王 名（行政学者、NGO・市民社会研究者）
- 第29回 賈 樟 柯（映画監督）
- 第33回 張 律（映画監督）

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）
- 第25回 ダニー・ユン（文化クリエイター）

台湾
- 第10回 侯 孝 賢（映画監督）
- 第18回 朱 銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）
- 第26回 タン・ミン・ウー（歴史学者）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）
- 第26回 ミン・ハン（ファッションデザイナー）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）
- 第22回 アン・チュリアン（民族学者・クメール研究者）
- 第28回 コン・ナイ（吟遊詩人、チャパイ・マスター）

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）
- 第23回 チャーンウィット・カセートシリ（歴史学者）
- 第24回 アピチャッポン・ウィーラセタクン（映画作家・アーティスト）
- 第28回 パースック・ポンパイチット（経済学者）
- 第31回 プラープダー・ユン（作家、映画作家、アーティスト）
- 第33回 トンチャイ・ウィニッチャクン（歴史学者）

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R. M. スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）
- 第23回 クス・ムルティア・パク・ブウォノ（宮廷舞踊家）
- 第25回 アジュマルディ・アズラ（歴史学者）

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）
- 第23回 キドラット・タヒミック（映画作家等）
- 第27回 アンベス・R・オカンポ（歴史学者）
- 第30回 ランドルフ・ダビッド（社会学者）

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ヴィジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

第 34 回大賞
真鍋 大度

日本
- 第1回 黒澤 明（映画監督）
- 第1回 矢野 暢（社会科学者）
- 第2回 中根 千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内 實（中国研究者）
- 第4回 川喜田 二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井 米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島 昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤 瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口 隆康（考古学者）
- 第9回 上田 正昭（歴史学者）
- 第10回 大林 太良（民族学者）
- 第12回 速水 佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間 守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下 武志（歴史学者）
- 第20回 三木 稔（作曲家）
- 第21回 毛里 和子（現代中国研究者）
- 第24回 中村 哲（医師）
- 第29回 末廣 昭（経済学者、地域研究者[タイ]）
- 第30回 佐藤 信（劇作家、演出家）
- 第31回 岸本 美緒（歴史学者）
- 第32回 林 英哲（太鼓奏者）
- 第34回 真鍋 大度（アーティスト・プログラマー・DJ）

韓国
- 第3回 金 元 龍（考古学者）
- 第6回 韓 基 彦（教育学者）
- 第8回 林 権 澤（映画監督）
- 第9回 李 基 文（言語学者）
- 第16回 任 東 権（民俗学者）
- 第18回 金 徳 洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄 秉 冀（音楽家）
- 第22回 趙 東 一（文学者）
- 第34回 キムスージャ（アーティスト）

第 34 回芸術・文化賞
キムスージャ

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1.目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2.賞の内容

大　賞

賞金　¥5,000,000

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体を対象としています。

学術研究賞

賞金　¥3,000,000

人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

芸術・文化賞

賞金　¥3,000,000

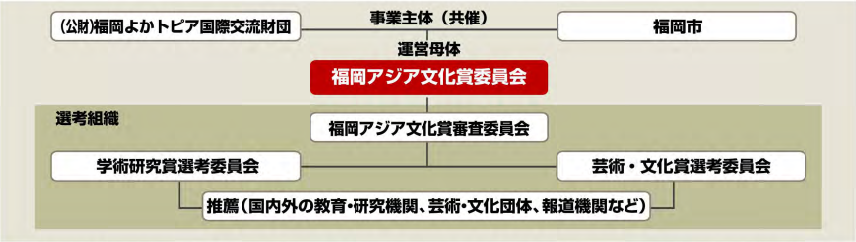
アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

3.対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4.主催

福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団※



※福岡よかトピア国際交流財団：アジア太平洋博覧会-福岡'89の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

福岡アジア文化賞委員会委員

委員は五十音順、敬称略

特別顧問	岡野　結城子	外務省国際文化交流審議官
〃	都倉　俊一	文化庁長官
〃	服部　誠太郎	福岡県知事
名誉会長	高島　宗一郎	福岡市長
会　長	谷川　浩道	（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長
副会長	石橋　達朗	九州大学総長
〃	打越　基安	福岡市議会議長
〃	中村　英一	福岡市副市長
監　事	小林　登茂子	福岡市会計管理者
〃	藤田　英隆	福岡市社会福祉協議会常務理事
委　員	青柳　俊彦	九州旅客鉄道株式会社取締役会長執行役員
〃	天野　こう	福岡市議会総務財政委員会委員長
〃	池松　裕子	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	石橋　正信	福岡市教育委員会教育長
〃	今井　俊之	日本経済新聞社専務執行役員西部支社代表
〃	今井　尚生	西南学院大学学長
〃	大曲　昭恵	福岡県副知事
〃	北島　己佐吉	九州産業大学学長
〃	絹川　智紹	日本放送協会福岡放送局長
〃	久保田　勇夫	株式会社西日本シティ銀行特別顧問
〃	倉富　純男	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	柴戸　隆成	株式会社福岡銀行取締役会長
〃	早田　敦	九州電力株式会社代表取締役副社長執行役員
〃	高添　博之	毎日新聞社西部本社代表
〃	田川　大介	株式会社西日本新聞社代表取締役社長
〃	中川　博行	朝日新聞社西部本社代表
〃	永田　潔文	福岡大学学長
〃	原田　修吾	九州運輸局長
〃	藤井　一郎	株式会社九電工取締役会長
〃	星野　光明	九州経済産業局長
〃	増田　雅己	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	松野　隆	福岡市議会副議長
〃	道永　幸典	西部ガスホールディングス株式会社代表取締役会長
〃	見野　由美子	特定非営利活動法人福岡市ノクリエーション協会理事長
〃	安永　幸一	福岡文化連盟副理事長

福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委 員 長／石橋　達朗
九州大学総長
福岡アジア文化賞委員会副会長

副委員長／中村　英一
福岡市副市長
福岡アジア文化賞委員会副会長

委　員／石坂　健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー
芸術・文化賞選考委員会委員長

委　員／内野　儀
学習院女子大学国際文化交流学部教授
東京大学名誉教授
芸術・文化賞選考委員会副委員長

委　員／河野　俊行
九州大学名誉教授・特任研究員
学術研究賞選考委員会副委員長

委　員／川原　正孝
株式会社ふくや代表取締役会長

委　員／下山　雅也
国際交流基金理事

委　員／竹中　千春
立教大学法学部元教授
学術研究賞選考委員会委員長

福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委員長／竹中　千春
立教大学法学部元教授
福岡アジア文化賞審査委員会委員

副委員長／河野　俊行
九州大学名誉教授・特任研究員
福岡アジア文化賞審査委員会委員

委　員／木宮　正史
東京大学大学院総合文化研究科教授

委　員／清水　一史
九州大学大学院経済学研究院教授

委　員／清水　展
京都大学名誉教授
京都大学東南アジア地域研究研究所連携教授

委　員／高原　明生
東京女子大学特別客員教授

委　員／田村　慶子
北九州市立大学名誉教授・特別研究員
NPO法人国境地域研究センター理事長

委　員／脇村　孝平
大阪経済法科大学客員教授

福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委 員 長／石坂　健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー
福岡アジア文化賞審査委員会委員

副委員長／内野　儀
学習院女子大学国際文化交流学部教授
東京大学名誉教授
福岡アジア文化賞審査委員会委員

委　員／宇戸　清治
東京外国語大学名誉教授

委　員／小川　忠
跡見学園女子大学文学部人文学科教授

委　員／片岡　真実
森美術館館長
国立アートリサーチセンター センター長

委　員／寺内　直子
神戸大学大学院国際文化学研究科教授

委　員／西村　幸夫
國學院大學観光まちづくり学部長

委　員／松隈　浩之
九州大学大学院芸術工学研究院准教授

委員は五十音順、敬称略

第34回大賞

真鍋 大度 MANABE Daito

アーティスト、プログラマー、DJ
（ライゾマティクス代表、STUDIO DAITO MANABE代表）

主な経歴・受賞歴

1976	東京都生まれ
2000	東京理科大学理学部学士号（数学）
2004	岐阜県立情報科学芸術アカデミー（IAMAS）DSPコース修了
2006	株式会社ライゾマティクス設立
2022	Studio Daito Manabe設立 その他、レクチャーやゲスト講師を務める

アルスエレクトロニカフェスティバル Award of Distinctionほか、カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル　チタニウム&インテグレーテッド部門グランプリ、D&AD Awards ブラックペンシル、文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞など国内外で受賞多数

Sonar Barcelona “morphechore - prototype”（2020）

ELEVENPLAY × Rhizomatiks “border 2021”（2021）

贈賞理由

真鍋大度氏は、アーティスト、インタラクションデザイナー、プログラマー、DJと複数の肩書きを有している。Perfumeとのコラボレーション（2010-）やリオ2016オリンピックフラッグハンドオーバーセレモニーでのARを駆使したプレゼンテーションをはじめ、先駆的なプロジェクトを実践した人物である。

真鍋氏の創作の起点は先進のメディアテクノロジーであり、その時代毎にスマートフォンやタブレット、ドローン、機械学習、AIなどをいち早く取り入れ、それらを従来の枠にとらわれない形式で表現やコミュニケーションへと展開していく。実験的かつ質の高い作品は世界で高い評価を得ており、メディアアートを志すクリエイターのカリスマ的存在となっている。

真鍋氏は、1976年、東京都に生まれ、東京理科大学理学部数学科を卒業後、岐阜県立情報科学芸術アカデミー（IAMAS）を修了している。学部時代は数学を専門的に身に着け論理的な思考力を深め、IAMASにて芸術としての実践を活性化させている。卒業後、2006年にライゾマティクスを共同で設立し、実験的なアート活動とクライアントワークを併走させつつ、世界規模のプロジェクトを多数展開していくなど起業家としても逸材である。また、多数の音楽フェスティバルでミュージシャン兼VJとして出演している点にも注目したい。

これらのバックグラウンドから生み出される作品群は、一貫して科学技術と芸術の融合に関するR&D（研究開発）の上に成り立っている。例えば、坂本龍一『センシング・ストリームズ』（2014）、Björk『*Mouth Mantra*』（2015）、スクエアプッシャー『*Terminal Slam*』（2020）、Arca『*Incendio*』（2023）などのアーティストから、脳情報学者の神谷之康『*dissonant imaginary*』（2019）や、CERN（欧州原子核研究機構）、ジョドレルバンク天文物理学センター等の科学機関まで、双領域を繋ぐ多彩なコラボレーションを実現している。

真鍋大度氏は、身体に根差す歌やダンスといった表現と科学技術をシンクロさせ、それを芸術へ昇華させつつ、未来社会への問題提起やエンターテインメントとしての可能性を提示している。今後、一層リアルとバーチャルの交錯が進む社会において、豊富な技術的知見を背景にヒトが選択しうる魅力的な未来像を作品やプロジェクトを通して発信し続ける真鍋氏は、世界やアジアにおいて誇るべき存在であり、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。

第34回学術研究賞

スニール・アムリス Sunil AMRITH

歴史学者
（イェール大学レヌ&アナンド・ダワン歴史学教授）

主な経歴・受賞歴

1979-97	ケニア、ナイロビ生まれ シンガポールにて教育を受ける
2005	ケンブリッジ大学博士号取得（歴史学）
2015-20	ハーバード大学南アジア史学メーラ・ファミリー教授
2016	インフォシス科学基金インフォシス賞受賞
2020-	イェール大学レヌ&アナンド・ダワン歴史学教授
2022	A.H.ハイネケン博士賞受賞（歴史部門）

【主な著作】
・*Decolonizing International Health*（2006年）
・*Crossing the Bay of Bengal*（2013年）
・*Unruly Waters*（2018年）
［邦題:『水の大陸 アジア』（2021年）］
・*The Burning Earth*（2024年）

John D. and Catherine T. MacArthur Foundation

Dan Renzetti/Yale University

贈賞理由

スニール・アムリス氏は、グローバルな視野の「鳥の眼」とローカルな文脈を重視する「虫の眼」の両者を併せ持つ稀有な歴史家であり、今後更なる活躍が期待できる逸材である。氏は既に英文単著を四冊発表しているが、これらにほぼ一貫しているのは、ベンガル湾を基軸とする南アジアと東南アジアにまたがる領域を対象にした、国民国家の枠を超えるアジア史をテーマとしている点である。

アムリス氏は、1979年にインド系移民としてケニアで生まれ、シンガポールで幼少年期を過ごす。その後、ケンブリッジ大学に進学し、2005年に博士号（歴史学）を取得している。学位論文は、*Decolonizing International Health*（2006）と題する、20世紀半ばの南アジアと東南アジアの国際保健の歴史を描いた一書に結実している。その後、ロンドン大学バークベック校講師、ハーバード大学教授を経て、2020年よりイェール大学の教授として歴史学を講じている。

第三作の*Crossing the Bay of Bengal*（2013）は、19世紀後半から20世紀前半にかけて、イギリス帝国の支配下に、約2700万の人々がベンガル湾を越えてインドからセイロン（スリランカ）・ビルマ（ミャンマー）・マラヤ（マレーシア）の労働現場へと移住した史実を主題としている。単なる移民史を超えて、移民労働者たちの過酷な労働現場における「生」の実相に迫ろうとする中で、移民たちの「心」の在処をできる限り探ろうとする試みがなされており、ベンガル湾をめぐる「精神史」とも言うべき作品になっている。

アムリス氏は、近作の*Unruly Waters*（2018）（邦訳『水の大陸 アジア』（2021））では、人と自然環境の関係性を主題にして、英領期のインドにおける干ばつ・飢饉への対応そして灌漑建設、独立後におけるダム建設そして緑の革命など、開発の過程が「人」と「水」の関係性を大きく変容させた史実に着目しつつ、その過程を環境・経済・政治への視点のみならず、思想のドラマを含んだ見事な語り口で描いている。さらに、中国を含めた広域のアジアにも視野を広げ、近年における「水」をめぐる危機的状況－気候変動（モンスーンの変調）、地下水の枯渇、国境紛争、海面水位の上昇など－を取り上げながら、現代的な問題意識を歴史劇の語りの中に織り込んでいる点も注目される。

インド系ディアスポラという自らのアイデンティティに基づきつつ、ベンガル湾を基軸とするローカルな文脈に基盤を置く「グローバル・ヒストリー」を実践する、類まれなアジアの歴史家であるスニール・アムリス氏は、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。

第34回芸術・文化賞
キムスージャ　Kimsooja

アーティスト

Kimsooja, 2016, portrait image, photograph by Giannis Vastardis, Courtesy of EMST,Athens, Greece and Kimsooja Studio

主な経歴・受賞歴

1957	韓国、テグ生まれ
1992-93	ニューヨーク近代美術館（MoMA）現代アートセンター（P.S.1）滞在作家
2001	ニューヨーク近代美術館（MoMA）現代アートセンター（P.S.1）にて『キムスージャ、針の女』を発表
2006	『息をする–鏡の女』をスペインのクリスタルパレスで発表
2013	第55回ベネチア・ビエンナーレの韓国館にて『キムスージャ、息をする: ボッタリ』を発表
2017	アートの祭典・ドクメンタ 14: ANTIDORON - The EMST Collectionに出品
2020	フランスのサンテティエンヌ大聖堂にステンドグラス『息をする』を恒久設置
2024	パリの現代美術館ブルス・ド・コメルスで、『息をする—星座』を発表

Kimsooja To Breathe, 2022
Permanent stained glass installation commissioned on the occasion of the 800th anniversary of the Cathédrale Saint-Étienne de Metz Commissioned by Ministry of Culture, France Courtesy of Axel Vervoordt Gallery and Kimsooja Studio Photo by Jaeho Chong

Kimsooja Cities on the Move – 2727km Bottari Truck, 1997
Single Channel Video, 7:03 loop, Silent Courtesy of Kimsooja Studio

贈賞理由

キムスージャ氏は、欧米中心の現代アートが多様な文化に広がった1990年代、アジア文化を起点に国際的な存在感を放ったアーティストである。韓国の伝統的な風呂敷包み（ボッタリ）を配した鮮やかなインスタレーションや、ボッタリをトラックに山積みにして移動したパフォーマンス／社会彫刻などで注目された。2000年代後半以降には、光の性質を利用して空間全体にスペクトル（虹の七色）を見せるインスタレーションを発展させ、壮大な宇宙観や普遍的な真理へ至らせる実践が、文化の違いを越えて高い評価を得ている。

キムスージャ氏は、1957年に韓国・大邱で生まれ、1980年代にソウルの弘益大学校、同大学院、パリの国立高等美術学校などで学んだ。1992-93年はニューヨークのPS1に滞在し、ボッタリを初めて作品に使った。日用品を大きくカラフルな布で包んだボッタリは、生地を縫う、包むといった行為が、女性の労働や生きることそのものを象徴する小宇宙ともなる。同時に政治的・経済的理由で移動や移住を余儀なくされるグローバル化の一側面も示唆する。

1999-2001年には代表作『針の女』を制作。これはキムスージャ氏自身が東京、ニューヨーク、ロンドン、メキシコシティ、カイロ、デリー、上海、ラゴスの雑踏で立ち止まる姿を、背後から撮影した映像作品である。激しく動く都市の時間に異分子として静止が持ち込まれることで、呼吸する根源的な身体が異なる時間軸に編み込まれる。グローバル化のなかで、自身の拠り所となる地域性、場所性を掘り下げた秀作といえる。

2006年には初めて自然光を用いた『息をする—鏡の女』を、マドリードの国立ソフィア王妃芸術センターのクリスタルパレスで発表。この作品では韓国伝統の五方色（オバンセク）や五行説が象徴する宇宙の構造が、光という非物質的な素材で表現され、空間は光に包まれた。

この間、ベネチア・ビエンナーレに複数回参加した他、世界の主要美術館での個展や国際展参加を重ねてきた。日本では1980年代後半からグループ展に参加しはじめ、1999年のCCA北九州のアーティスト・イン・レジデンス、東京国立近代美術館、福岡アジア美術館、横浜トリエンナーレ、越後妻有トリエンナーレなどに出品。近年も2022年にはフランス・メッス市のサンテティエンヌ大聖堂にステンドグラスを恒久設置、2024年にはパリの現代美術館ブルス・ド・コメルスで、空間全体に鏡を配した『息をする—星座』を発表。

各地で分断や衝突が拡がる今日、キムスージャ氏の壮大な実践は、改めて森羅万象の営みと世界の調和や均衡を意識させるものであり、その留まることのない挑戦と創造性は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

第34回 福岡アジア文化賞

授賞式

日時：2024年9月26日（木）18：30～20：00　会場：福岡国際会議場 メインホール

第1部

受賞者紹介

主催者代表あいさつ	福岡市長　高島 宗一郎
お言葉	秋篠宮皇嗣殿下
登壇者・来賓紹介	
選考経過報告	九州大学総長　石橋 達朗
贈賞	福岡市長　高島 宗一郎
	（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長　谷川 浩道

花束贈呈

第2部

祝賀パフォーマンス	筑前博多独楽／博多金獅子太鼓（三代目筑紫珠楽）

受賞者功績紹介映像

受賞者スピーチ・インタビュー

第34回福岡アジア文化賞 授賞式

大賞の真鍋 大度氏への贈賞

学術研究賞のスニール・アムリス氏への贈賞

芸術・文化賞のキムスージャ氏への贈賞

ステージがライトアップされ、音楽と映像、ムービングライトの煌びやかな演出で幕を開けた第34回福岡アジア文化賞授賞式。秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席のもと、大賞の真鍋大度氏、学術研究賞のスニール・アムリス氏、芸術・文化賞のキムスージャ氏と各界関係者、市民が一堂に会して式はスタートしました。

初めに、高島宗一郎福岡市長が主催者を代表して挨拶。「未来へつながる、持続可能で多様性のある社会の実現が求められているからこそ、アジア地域の多様な文化と価値を広く伝える福岡アジア文化賞の役割は、これまで以上に重要なものとなる」と述べました。続いて秋篠宮皇嗣殿下より、お祝いのお言葉を賜りました。

審査委員長の石橋達朗九州大学総長より今年度の選考経過報告が行われた後、高島市長と谷川浩道（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長より、賞状とメダルが授与されました。最後に花束が贈呈されると、会場は温かい祝福の拍手に包まれました。

祝賀パフォーマンスでは、三代目筑紫珠楽が登場。福岡県無形文化財の伝統芸能「筑前博多独楽」と「博多金獅子太鼓」の圧巻の舞台で、観客を魅了しました。

受賞者の輝かしい功績が映像で紹介された後、受賞者によるスピーチでは、活動の信念や喜びの声、そして今後の抱負が伝えられました。続くインタビューでは、スクリーンに作品や著書が投影され、活動の原点や歩みが語られました。

フィナーレでは受賞者に会場からは一段と大きな拍手が送られ、授賞式は幕を閉じました。

花束贈呈

大賞受賞者インタビュー

高島市長による主催者代表挨拶

石橋総長による選考経過報告

ムービングライトと映像によるオープニング

祝賀パフォーマンス　博多金獅子太鼓（三代目筑紫珠楽）

同左・筑前博多独楽

秋篠宮皇嗣殿下お言葉

本日、「第34回福岡アジア文化賞」授賞式が開催されるにあたり、大賞を受賞される真鍋大度氏、学術研究賞を受賞されるスニール・アムリス氏、そして芸術・文化賞を受賞されるキムスージャ氏に心からお祝いを申し上げます。

そして今日、皆様と共に出席し、受賞者それぞれの活動や研究の一端について、この会場でお話を伺うことができますことを誠に嬉しく思います。

「福岡アジア文化賞」は、アジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化・芸術の創造、そしてアジアに関わる学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するために創設されました。爾来、アジアの文化とその価値を世界に示すにあたり、本賞の果たした役割には誠に大きなものがあります。

私自身、東南アジアを中心に、いくつかのアジアの国々を訪れ、多様な風土や自然環境によって創り出され、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗、芸術など、文化の豊かさと深さに関心を抱きました。

それとともに、貴重な文化を記録・保存・継承し、さらに発展させていくことの大切さや、新たに創造していくことによる広がり、そして、アジアを深く理解するための学術の重要性を強く感じてまいりました。このことからも、本賞がアジアの文化・芸術の価値と、それらについての学術的な側面を伝えていくことは、大変意義深いことと考えます。

その意味から、本日受賞される3名の方々の優れた業績とその意義が、アジアのみならず広く世界に向けて発信されることを願っております。そして、国際社会全体でそれらを共有することは、人類の貴重な財産の蓄積につながることと思います。

おわりに、受賞される皆様に改めてお祝いの意を表しますとともに、この「福岡アジア文化賞」を通じて、アジアの各地に対する理解、そして国際社会の平和と友好が促進されることを祈念し、授賞式に寄せる言葉といたします。

大賞　真鍋 大度

テクノロジーと芸術表現の可能性を探究する喜びを伝え続ける

福岡アジア文化賞を受賞できたことを、心から光栄に思います。この場をお借りして、私の人生と作品に大きな影響を与えてくださった方々への感謝を述べさせていただきます。

私の創作活動は、音楽、数学、プログラミングを用いて、常にテクノロジーと身体、人間の関係性を探求することに重点を置いてきました。テクノロジーの進歩は私たちの生活に大きな変革をもたらしましたが、同時に私たちの感性や表現の可能性も大きく広げてくれました。私の作品を通じて、テクノロジーが単なる道具ではなく、人間の創造性を増幅させ、新たな芸術表現を生み出す力を持っていることを示すことができたのではないかと思います。

まず、家族や友人、特に両親への深い感謝を申し上げます。幼少期に与えられた音楽環境と数学環境が今日の私のクリエイティブな活動の礎となっています。

次に、クリエイティブコーディングのコミュニティに感謝します。このコミュニティで、世界中の才能あるアーティストや技術者と出会い、刺激を受け、数々の国際的なチャンスを得ることができました。私が主宰するアートコレクティブ、ライゾマティクスの仲間たち、そしてコラボレーターの方々にも、深く感謝いたします。

皆さんの努力と創造性のおかげで、新たな領域に挑戦し、成長する機会を得ることができました。この賞は、私一人の力ではなく、多くの人々の支援と励ましの結果だと考えています。これからもテクノロジーと芸術の融合を追求し、人々に感動と驚きを与える作品を生み続けます。次世代のクリエイターたちにも、テクノロジーと芸術の可能性を探求する喜びを伝えていきたいと思っています。

アジアと世界の架け橋となるような作品を創造し続けることで、この名誉ある賞に恥じぬよう努力してまいります。改めて、ありがとうございました。

インタビュー

Q：テクノロジーの進歩でこれからどんな芸術表現が生まれていくと思いますか。

A：テクノロジーを使った表現は、すぐに古くなってしまう一方、次々と更新できるという面白さがあります。AI（人工知能）と人間との共同制作で、今まで考えられなかったような作品が生まれていくのではないかと思います。

Q：チームで作品を制作する際に大切にしていることは何でしょうか。

A：スクリーンで紹介された*border 2021*は様々なプロフェッショナルたちが集まり作ったものです。私はディレクターとして、アーティストやエンジニアの専門性を100%活かせるような作品にしたいと考えています。柔軟に対応する環境を作り、皆で作品を創っていくことが大事ですね。

Q：次世代のクリエイターへのメッセージをお願いします。

A：テクノロジーはアーティストにとって有益なツールになります。これからAIにより信じられない量のインプット・アウトプットができるようになると思いますが、最終的には人間がそれを鑑賞して楽しむものです。自分の関心や、洞察力、感性を磨くことを大切にしてほしいです。

学術研究賞　スニール・アムリス

歴史研究を通して先人から学び気候危機という脅威に立ち向かう

福岡市民の皆様、福岡アジア文化賞委員会へ、こうして初めて福岡市を訪れる素敵な機会をいただき、深く感謝いたします。ずっと前から福岡にあこがれていました。今日、私と共にこのステージに立たれていらっしゃる2名の受賞者の方と、私よりも前に本賞を受賞されている素晴らしいアーティストや学者の方々のこと考えると、大変光栄であり、また身の引き締まる思いです。

知識は一個人の努力だけでは発展しません。私は20年もの間、南アジア、そして東南アジア研究において立派な伝統を持つ日本の同僚との交流を大切にしてきました。そして、私のキャリアを通して、まさに私の先生でもある、真に優秀な学生たちと共に研究できたことはとても幸運でした。彼らは、常に私の話の最初の聴衆であるだけでなく、強い好奇心を持ち、最も批判的な視点で聞いてくれました。

新たな国際的緊張が生じるとともに、技術革新が道徳的、法的規則を凌駕してしまう危険性のある現代において、私たちは気候危機という共通の脅威に直面しています。この重大な局面では、歴史を研究すること自体を、未来には関係のない道楽だと思う人もいます。私は、それは大きな間違いだと考えます。福岡アジア文化賞は、人類の表現と創造性の蓄積にあたり、アジアの文化が独自の貢献を成しているということを、より明確に示すために創設されたのであり、私たちはいまだかつてないほどにその英知を必要としているのです。

インタビュー

Q：なぜ南アジア・東南アジア地域の歴史を研究しようと思ったのでしょうか。

A：気候変動、政治的分断、不平等などの国際問題を考える時、驚くほど多様な文化を持つ南アジア・東南アジア地域の研究は、とても重要です。歴史は、現代の社会的・経済的な問題の原点を理解する方法であるとともに、過去の社会を理解する発見の楽しさもあるのです。

Q：6年ぶりの著書*The Burning Earth*についてお聞かせください。

A：グローバル環境史を描くこと、つまり人々や国家間の暴力や不平等が自然に与える影響を示すことを試みています。そして、西洋の視点からよく語られるグローバル・ヒストリーですが、本書ではアジアの経験や考え方を重視しました。平和構築と環境正義への私の願いとして、読んでもらいたいです。

Q：身近かつ深刻な環境問題について、私たちが歴史から学べることはありますか。

A：長い間、アジア社会は自然災害に対し、知恵と回復力をもって順応してきました。その英知の中に、私たちを鼓舞し、未曾有の環境問題に立ち向かう勇気の兆しを見ることができます。また日本は、高度経済成長期に環境破壊を経験した国ですが、被害を認識し、改善を試みた結果、空気や水はきれいになりました。環境危機と対峙する今、日本は良い前例であり、世界を率いていける国だと思います。

芸術・文化賞　キムスージャ

アーティストとしての取り組みが世界の調和につながってほしい

秋篠宮皇嗣同妃両殿下、市長、名誉ある委員の皆様、そして来賓の皆様、福岡でお会いすることができ大変嬉しく思います。そして第34回福岡アジア文化賞芸術文化賞受賞者としての名誉を光栄に思います。

福岡市は世界の中でも、私が若い芸術家の頃から作品を認めてきてくれた都市のひとつです。人生のこの段階で、このような貴重な評価を受けることは、私にとって大きな意味があります。長きに渡る友情、信頼、そしてサポートに感謝申し上げます。

この場を借りて、私の作品を長い間見ていただき、第34回福岡アジア文化賞芸術文化賞受賞をサポートしてくださった皆様へ厚く御礼申し上げます。また、アジアとアジアを越えた地域で、アジア芸術と文化のアイデンティの認識をさせるという重要な訳割を担う福岡市に最大限の敬意を表したいと思います。

最後になりますが、アーティストとしての私の取り組みが、私達が生きるこの破壊的で暴力的な世界において、人間の有様、そして生命と芸術の真の価値を鼓舞し、考察し、調和と平和をもたらすことに貢献できることを願っています。ありがとうございました。

インタビュー

Q：作品には、縫う、包むといった概念が共通していますが、なぜこの手法を選んだのでしょうか。

A：画家として私は、常にキャンバスの表面を境界線、また障壁として、自己と他者について考え、伝えるための方法論を探していました。ある時、布に針を通そうとして、まるで全宇宙のエネルギーが私の体に落ちて針の先端にたどり着いたような、強い衝撃を感じました。針が縦と横からなる構造を持つキャンバスと同じ作りの軸であることを見つけ、研究しようと決心した瞬間でした。女性の家庭生活を現代アートにおいて再文脈化するために、ボッタリ（韓国の伝統的な風呂敷包み）など日常生活のオブジェを使いました。そして、私は自分のビジョンと実践を、空間や建築のプロジェクトにも広げることができるようになりました。このアイデアはその時から今に至るまで、進化し続けているのです。

Q：福岡市民の皆さんに芸術を通して何を伝えたいですか。

A：福岡は作品を認め、所蔵していただいた最初の都市で、私にとって、とても特別な場所だと思います。アーティストの将来に対する皆様の洞察力とビジョンに心から感謝します。1990年代から、日本は芸術や文化も進んでいて、女性アーティストにも親交的な国でした。暴力と破壊によって分断されつつある国際社会の中で、アジアの芸術と文化のために努力を続けている福岡市民と福岡市に感謝の意を表します。

大賞 市民フォーラム

真鍋 大度

アーティスト、プログラマー、DJ
（ライゾマティクス代表、STUDIO DAITO MANABE代表）

「身体と機械の関係性に着目したアート」

■ 日　時／2024年9月27日（金）18:30〜20:30
■ 会　場／UNITEDLAB メインホール（中央区大名）

第1部 ライブパフォーマンス

Face visualizer, instrument, and copy

世界30都市以上で上演された代表作品をアレンジしパフォーマンス。真鍋氏が電子機器を操作し、電気刺激で変化する表情が巨大ディスプレイに映し出されると、会場は大きな拍手と歓声で盛り上がりました。

真鍋氏は、活動の原点である初期の作品*Face visualizer, instrument, and copy*に新しい音を取り入れたとパフォーマンスについて説明。自分の表情を自身で作り他人にコピーし、その人が笑顔や怒った顔になることは、その過程も含めて面白いのではないかと考えたのが制作のきっかけだと述べました。音の刺激を電気信号に変換したり、電気刺激で左右非対称に表情を動かしたりすることで、通常は見られない表情が作り出される。違和感が面白いと感じられたのではないかと語りました。

第2部 クロストーク

実験的メディアアートから大規模プロジェクトへ

冒頭にコーディネーターの松隈氏から、真鍋氏のこれまでの作品をプロジェクトの規模に分けて掘り下げていくと説明。「小規模にR&D（研究開発）で実験する」「自由度の高い自主プロジェクトに応用」「大規模なプロジェクトに活用」の3つのテーマが示されました。

はじめに、福岡を拠点に活動するメディアアーティストの藤岡氏が、第1部のパフォーマンスの面白さに言及し、真鍋氏の初期から現在への活動の変遷に沿って話が進みました。Youtubeのサービスが開始された初期の頃に、いち早く顔への電気刺激や筋伝センサーで身体を動かし音を出す実験を公開し、世界中で有名になったことや、他にも多くの研究開発を行い、そのきっかけや仕組みの話で盛り上がりました。

つづいて、自由度の高い自主作品について、映像を投影しながら話が進みました。真鍋氏の創作活動について、R&Dで小規模に実験したものをまとめ、自由度の高い自身のプロジェクトに作品として割り当てる。そして、制約が多い大規模プロジェクトでその技術を応用するスタイルが特徴的だと藤岡氏は説明。真鍋氏は「実験的なアートの良いところは自由度が高いところ。その先に何かビジネス等につながる可能性があるということを認識しながらも、この時点では収益などを考えずに振り切って制作している」と話しました。

そして、大規模なプロジェクトに取り入れているプロジェクションマッピングの技術などについて解説。舞台演出は、技術・機械とパフォーマーの双方からのアプローチとバランスで成り立っていると述べました。プロジェクトを支える技術の話に観客は惹きつけられました。

最後に真鍋氏から、自分の活動は音をルーツにしたメディアアートであることや、音楽も自分で制作し自由な表現を追求していきたいということが語られ、クロストークは幕を閉じました。

対談者 **藤岡 定**
（anno lab代表取締役）

コーディネーター **松隈 浩之**
（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

学術研究賞 市民フォーラム

スニール・アムリス

歴史学者
（イェール大学レヌ&アナンド・ダワン歴史学教授）

「『ベンガル湾』の歴史、そして私たちにとっての『環境問題』の未来」

■ 日　時／2024年9月28日（土）13:00〜15:00
■ 会　場／アクロス福岡 4F国際会議場（中央区天神）

第1部 基調講演

気候正義のための歴史研究の重要性

アムリス氏は、ベンガル湾の歴史を研究するに至った経緯、そして現代の気候変動に立ち向かうためになぜ歴史研究が重要なのかについて、次のように語りました。

———

子どもの頃をシンガポールで過ごした私は、移民労働者の姿を見て、自分の意思で自由に移動できる人々と、規制や管理に縛られ移動できない人々という、世界で最も根本的な分断の存在を幼いながらに疑問に感じていました。この疑問が私の学問的研究の原動力となりました。

国や地域を越えて横断的に歴史を研究するグローバル・ヒストリーに触発された私は、当初、南アジアと東南アジアにおけるベンガル湾を渡る人々の移動をとおして、文化的なつながりを研究していました。そして、人間社会と環境の相互関係に研究を発展させ、ベンガル湾の気候の特徴であるモンスーンが、湾を隔てた土地と民族をどう結び付けてきたかを考えるようになりました。日本の歴史学者による先進的な手法にも刺激を受けました。

ベンガル湾は、世界の環境未来を考える上で、極めて重要な地域です。ベンガル湾では複合的な要因が影響し合うため、モンスーンは予測できない変化を遂げ、沿岸国に甚大な災害や感染症をもたらしています。気候変動に対する脆弱性を克服し、気候正義を議論するためには、この地域の歴史の理解が不可欠です。なぜなら、モンスーンの挙動が前例のないものであっても、それに立ち向かう政治制度、社会的・文化的な結びつきは、今までの歴史に深く根差しているからです。そして、現代において最も緊急に対応を要するのは、傷ついた地球を修復することです。それには、ベンガル湾の歴史から見つけ出せる人間の文化の境界、さらには生物の種の境界を越えて「つながる」感覚を取り戻す必要があります。福岡アジア文化賞が多様なアジアの文化に価値を見出しているように、気候危機という局面においては、知恵の多様性を回復し、再構築していくべきなのです。

第2部 対談

国を越えた問題に取り組むために

はじめに、アムリス氏と同じくシンガポールに学術研究の原点を持つ神田氏より、1つの国にとどまらない社会的・経済的・環境的な問題に取り組むために、私たちはベンガル湾の歴史から何を学べばよいかとの質問が投げかけられました。アムリス氏は、アジアの港湾都市がベンガル湾でつながっていることに触れ、国境を越えた「地域のアイデンティティ」の共有が重要であると指摘。自国だけでなく周辺地域の歴史も学び、地域の結びつきがいかに強いものなのかを若いうちに理解すること、それを促す教育システムの構築が必要だと述べました。さらに、私たち自身や現代の若者が、複数のアイデンティティを持ち合わせてきた人々の歴史を思い起こすことで、過去の社会の開放性から学び、近年強まっている閉鎖的な考えを取り払うことになるとの見解を示しました。

続いて、気候変動によって移動を余儀なくされる人々を、国家という枠組みでどのように受け入れていくのかに話題が及びました。アムリス氏は、今は豊かな国に住む人も無関係ではなく、皆が脆弱な状況であると認識することが必要と強調。だからこそ、気候変動の影響を受けるリスクが高い人々に共感し、そのリスクを共有すること、そのような人々が誤解による差別を受けないように正しい知識を持つことが重要だと語りました。会場からの質問も交えて話は熱を帯び、熱心に回答するアムリス氏の姿が印象的な対談となりました。

対談者 **神田 さやこ**
（慶應義塾大学経済学部教授）

コーディネーター **脇村 孝平**
（大阪経済法科大学客員教授）

芸術・文化賞 市民フォーラム

キムスージャ
アーティスト

「縫う、包む、解く— キムスージャの世界観」

■ 日　時／2024年9月28日(土)17:00～19:00
■ 会　場／福岡アジア美術館 あじびホール(博多区下川端町)

対談

自分自身のリアリティに根差したアートを追求

対談者に森美術館館長の片岡真実氏を迎え、キムスージャ氏の多様な作品に共通している「縫う、包む、解く」といった考え方に迫りました。会場となった福岡アジア美術館は、キャリアの初期作品『演繹的オブジェ』(1997)を日本で初めて所蔵。北九州市で滞在作家として活動していたことにも触れ、「福岡はいつも私の作品を理解しサポートしてくれるまち」と福岡との縁を紹介しました。

絵を描くことだけでなく、音楽や言語、パフォーマンスなど色々なことに興味があった学生時代。大学で絵画を学び、自分なりの手法を模索しつつも、常にキャンバスの縦と横の糸や内部の構造について考えていたことが、縫う、包むといったパフォーマンスに進化していったと述べました。「ある日、母のベッドカバーを縫っていて、針を布に押し当てた瞬間、宇宙から体と針が接している点に電気が降りてきたような衝撃を受けた。それは稲妻のように、私の創作のパッションとなった」と自身のアートの原点について話したキムスージャ氏。韓国の伝統的な風呂敷包み「ボッタリ」を使った特徴的な作風は、この経験により、三次元的アートに直感的、衝動的に進んでいったと述べました。また、留学生として初めて来日した時のことを振り返り、「アジアの国は似ていると思っていたが、色の感受性は全く違うものだった。日本は伝統的に抑えた色味を好むが、韓国は鮮やかな色を好む。この時から色のスペクトルにも興味を持ち、近年の光のプロジェクトにもつながっている」と回顧しました。

1999～2001年に発表した、都市の雑踏でキムスージャ氏自身が一人佇む姿を背後から撮影した映像作品『針の女』について、「30分数動だにせず立っていると、自分が立っている場所こそが中心だという感覚になり、人間に対する愛も感じた。人の波の後ろから、白い波が追ってくるように感じ、自分自身が変わったような有意義な経験だった」と解説しました。この作品はニューヨークなど世界8都市に広がり、創作されたことが語られました。

2000年代からは光の性質を利用した作品を展開。光のスペクトルを欧米では虹色と表現するが、キムスージャ氏は韓国伝統の五方色(オバンセク)の考え方にフォーカスしたと話しました。五方色は白、黒、赤、青、黄の五つの色にとどまらず、方向、季節、星、性格、身体との関連性などの象徴的な意味を持つと述べ、『息をする一鏡の女』(2006)について解説しました。鏡を見るということを「縫う」という行為、ガラス窓の表面を建物と外とを隔てる境界線とみなすことで、回折格子フィルムを「生地」と考え、ボッタリを建築という形で体現するに至った着想を語りました。

最後に、複雑な現代において、アートの実践者としてどのように貢献できるかという話題に話が及びました。2001年にニューヨークで同時多発テロが起きた日、数十分前まで現場にいたというキムスージャ氏は、戦争や災害に対して、作品を通じて祈りを捧げてきたそうです。「私は世界の平和と調和を常に望んでいる。目の前の人に、あなたのことを大事にしているのだと伝え続けることで、より良い世界を、次の世代へ手渡していきたい」と想いを伝えました。片岡氏は、作品のモチーフである五方色が、ひとつの色も欠けることなく常に変化し調和していく様を、多様なアイデンティティが共生していく人類の営みに重ねて、対談を締めくくりました。スクリーンに映し出される数々の作品と、キムスージャ氏の作品に込めた思いに心を打たれる時間となりました。

コーディネーター **片岡 真実**
(森美術館 館長／国立アートリサーチセンター センター長)

連携企画

福岡アジア文化賞受賞記念 キムスージャ展

期間／2024年9月14日(土)～10月29日(火)　　会場／福岡アジア美術館　アジアギャラリー

キムスージャ氏の「第34回福岡アジア文化賞　芸術・文化賞」受賞を記念し、福岡アジア美術館にて記念展示を開催しました。

キムスージャ氏は、アジア・欧米の現代美術界で精力的に活躍するアーティストであり、人の一生とともにある布、縫う、包む、解くという一貫したテーマで、私たちの世界や時代が直面する課題に普遍的な問いを投げかけてきました。本展では、福岡アジア美術館が所蔵する同氏の初期インスタレーション作品《演繹的オブジェ》とともに、代表的映像作品の《針の女》を紹介しました。

キムスージャ《演繹的オブジェ》1997年、中古の布・ベッドカバー、福岡アジア美術館蔵

展示風景

キムスージャ《針の女　東京》
1999年、シングルチャンネル映像、作家蔵、
Coutesy of Kimsooja Studio

キムスージャ《針の女　北九州》
1999年、シングルチャンネル映像、作家蔵、
Coutesy of Kimsooja Studio

福岡ユネスコ・アジア文化講演会

「江戸時代における長崎への画家遊学 ～司馬江漢を中心にして」

福岡アジア文化賞の歴代受賞者を講師に迎え開催する「アジア文化講演会」。学術研究賞を2022年に受賞した、美術史家のタイモン・スクリーチ氏が登壇しました。

日　時／2024年2月17日(土)　13:30～16:30
会　場／電気ビル共創館3Fカンファレンス A会議室
講　師／タイモン・スクリーチ(2022年(第32回)学術研究賞受賞者／
　　国際日本文化研究センター教授)
対談者／植松有希(板橋区立美術館学芸員)

大賞　真鍋 大度
アーティスト、プログラマー、DJ

■日時／2024年9月27日(金)10:50～11:50　■会場／福岡市立舞鶴小学校

「好きなことを仕事にすること」というテーマで、6年生の児童に向けて講演を行った真鍋氏。音楽番組で流れる映像の制作や、イベントの演出を仕事にしているという自己紹介の後、実験的なアート活動として、音楽を電気信号に変換したり、自分の表情を電気信号で友達の顔にコピーしたりして、人の表情をコントロールする作品を披露。生徒たちはスクリーンに次々と投影される映像に目を輝かせ、真鍋氏が手掛けたミュージックビデオの撮影現場の話に真剣に耳を傾けました。

真鍋氏は、子供の頃にゲームやプログラミングに夢中になったこと、大学に進学して苦戦したが、学問以外に好きなことを見つけ、DJ活動を続けて、特技のプログラミングを使った作曲活動に行きついたこと、好きな事を追求して大きな仕事へ繋がったこと、仕事仲間との絆について語りました。

自身の作品に取り入れているデジタル技術にも言及し、撮影した生徒たちの画像をその場で猫のイラストに変換するなど、生成AI（人工知能）についても分かりやすく説明。生徒たちからは、AIを使って音楽やアートができることや作品内容に関する質問が寄せられ、自分たちの将来の可能性について考える時間となりました。

参加者の声

- 電気を使って表情や指をコントロールできるなんて思いもせず、とても驚いた。
- 自分の好きなこと、得意なことを生かし、自由に将来の職業を決めようと思った。世界で活躍できるように、これからがんばろうと思った。
- たとえ失敗しても、立ち直り、一から努力したことが心に残った。私もあきらめない心を忘れずにこれから頑張ってみようと思う。
- 自分のしたいことや興味のあることを追いかけ続ける行動がすごいなと思った。

学術研究賞　スニール・アムリス
歴史学者

■日時／2024年9月25日(水)14:25～16:00　■会場／福岡雙葉高等学校

1、2年生の生徒に迎えられたアムリス氏は、「皆さんは今、何に1番関心がありますか。そして解決できたらいいなと思う社会課題の中で、何が1番重要だと思いますか。この質問に答えることが、今、私がここにいる意味だと考えています」と優しく語り始めました。生徒たちと同じ年代の頃、人権や貧困の問題に関心を持っていたアムリス氏。青年期まで過ごしたシンガポールの発展を例に、環境問題も人間の行動の結果であると指摘し、歴史への理解の重要性を示しました。また、人間の生活は昆虫など生物に依存しているにもかかわらず、人間が生息地を破壊し昆虫が姿を消しつつあると述べ、気候変動への危機感を伝えました。自身のキャリアを交え、科学的、技術的、文化的に複合した課題が気候危機の背景にあることも語られました。

続いて英語で質疑応答が行われ、自分の将来に向けてすべきことや、社会課題の解決に役立つために学ぶべきことなど、たくさんの生徒から質問が寄せられました。「世界は急速に変化しています。皆さんが、今学んでいる分野と異なる分野のアイデアを受け入れ、広い視野を持ち、行動に移すことが大切です」とメッセージを送り、生徒たちとの熱気あふれる交流を締めくくりました。

参加者の声

- 歴史を学ぶことは、ただ知識を得るだけでなく、今を知り、進むべき未来への道筋を捉える、まさに「温故知新」を体現していると思った。
- 環境問題について、今までは気候や大気の影響のみを考えていたが、歴史的な背景やその要因などを見ることで、深く考えることができるとわかった。
- 「理系に進む人は文学や詩に触れ、文系に進む人は科学的な知識を得て、視野を広げるべき」という言葉が印象に残り、苦手な科目にも一生懸命取り組もうと思った。

芸術・文化賞　キムスージャ
アーティスト

■日時／2024年9月27日(金)14:50～16:00　■会場／福岡市立内浜中学校

「作品を説明するのではなく、作品とこれから話すこと、そして皆さんが想像するイメージ、それが融合して対話が生まれるようなアーティスティックな時間になってほしい」という、キムスージャ氏の想いとともに、生徒との交流は幕を開けました。これまで発表してきた数多くの作品をスクリーンに投影し、様々な視点から物事を捉え、創作活動を行っていることを生徒たちに語りました。

オイルペインティング作品を主としていた活動初期から、「人や国の境、様々な意味の壁やバリアといったものを作品を通して越えていきたいと常々思っていた」と語ったキムスージャ氏。母のためにベッドカバーでボッタリ（韓国の伝統的な風呂敷包み）を縫っていた時、針を柔らかい布に刺した瞬間に、電気ショックを浴びたような衝撃を受けたと、自身のアートが生まれた瞬間について話しました。映し出される鮮やかな布の作品や光のインスタレーションの映像と相まって、生徒たちの心に響き、次々と問いかけの手があがりました。ボッタリの刺繍には模様によって愛や子孫繁栄の意味があることなど、作品を通じてアジア文化への興味を深めた生徒たち。最後に生徒代表からお礼と感想が伝えられ、全校生徒から温かい拍手が送られました。

参加者の声

- ただ作品を描くだけでなく、作品を通じて人生を表現することに共感した。
- 光を使った作品はとても綺麗だった。色々な視点から物事を考えることができていてすごいなと感じた。
- キムスージャさんが世界を広げたい、といつも考えていると聞いて、私もそんな風に考えられるようになりたいなと思った。

2017年(第28回)大賞受賞者

パースック・ポンパイチット(経済学者)
クリス・ベーカー(歴史学者)

講演会

Love, Loss and Landscape: the oldest Thai poems
(愛、喪失、風景〜タイ最古の詩の世界〜)

■ 日　時／2024年11月17日(日)13:00〜15:00
■ 会　場／JR博多シティ 10F大会議室
■ 主　催／九州大学アジア・オセアニア研究教育機構、福岡市、(公財)福岡よかトピア国際交流財団

クリス・ベーカー氏

パースック・ポンパイチット氏

人類を突き動かすものは何なのか

1980年代から急速に経済発展してきたタイの社会変動を、東洋と西洋の知性の協働、社会科学と人文科学の融合をとおして複眼的で総合的な視点から分析し、新たな展開と深化をもたらしてきたパースック・ポンパイチット氏とクリス・ベーカー氏。

詩から見えてくる歴史をとおして、人類に必要なものは何なのか、問いかけます。

講演は、約500年前にタノ語で書かれ、多くの謎に包まれた4つの長編詩について語られました。湿気が多いタイの風土により原作は残らず、タイトル、著者、時代、誰のため、何のために書いたのか不明である詩を、両氏は全て英訳し、より多くの人に、その感動と驚きを与えました。

一つ目の詩は、*Nirat Hariphunchai*(ハリプンチャイ(現ランプーン県)への旅路にて)。唯一時代が記されている詩であり、1517年に書かれたものです。巡礼の旅、そして愛する人への言葉が綴られます。街を守る象徴のワニが水しぶきあげて暴れ、美しく咲き誇る赤い花が寺院を覆う様子、その風景とともに情緒が溢れだします。

二つ目の詩*Ocean Lament*(海の哀歌)。生命みなぎる生物たちがいる風景、そして海への畏怖、愛する人の思い出、と詩は奏でられます。苦悩は、肉体的な苦痛で表現されます。そして、この詩は突然に終わります。しかし、両氏は言います。読む者にイメージを残した詩であると。大海原に浮かぶ船、空っぽの空、失ったもの。

三つ目の詩*Twelve Months*(12か月)。作者はおそらく王か将来の王。自分自身を、ありのままの人間として、季節の移り変わりとともに表現していきます。英国の詩人アルフレッド テニスンが、有名な哀歌『イン・メモリアム』を書いた同じ理由「歌わなければならないから、歌うだけ」で、この詩を書いたのでしょう。詩を書くこと自体が、悲しみをコントロールする方法だったのです。

四つ目の詩*Lilit Phra Lo*(リリット プラロー)とは、若い王の名前です。隣国の王女との情熱的な愛と悲劇の詩です。憎しみで争う両国により、王子・王女は矢に射られ倒れます。悲しみが溢れ、両国に復讐を戒めます。この詩は、絵画や彫像となり、舞踏団によって戯曲化され、讃えられている詩です。

情熱的な美しい愛の詩。季節の移ろいとともに、情操が相互作用する風景の詩。2022年、*Nirat Hariphunchai*505周年を記念し、同じ旅路を両氏は歩いて辿りました。寺院の中から満月が昇るのを眺め、当時の風景を想いました。愛・喪失・風景。私たち人類に、大きな力を与えてくれるもの、突き動かすものは何なのか。両氏が詩を詠んでいくうちに、タイの風景が浮かび上がり、物語の中に誘いこまれたような雰囲気に会場は包まれていきました。

福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑
FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990-2023

第1回 1990

創設特別賞
巴 金
BA Jin
(中国／作家)

『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞
黒澤 明
KUROSAWA Akira
(日本／映画監督)

『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞
ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
(英国／中国科学史研究者)

中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞
ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
(タイ／作家・政治家)

大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞
矢野 暢
YANO Toru
(日本／社会科学者)

日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大　賞
ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
(インド／音楽家・シタール奏者)

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

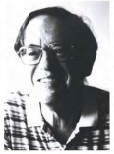
学術研究賞
タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
(インドネシア／歴史学者・社会科学者)

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞
中根 千枝
NAKANE Chie
(日本／社会人類学者)

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞
ドナルド・キーン
Donald KEENE
(米国／日本文学・文化研究者)



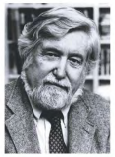
大著『日本文学史』はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 1992

大　賞
金 元 龍
KIM Won-yong
(韓国／考古学者)

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞
クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
(米国／文化人類学者)



インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞
竹内 實
TAKEUCHI Minoru
(日本／中国研究者)

社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
(フィリピン／建築家)

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大賞
費 孝 通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞
ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）

マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞
川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞
ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大賞
スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞
王 賡 武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞
石井 米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞
パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）

インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大賞
クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞
韓 基 彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）

独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞
辛島 昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）

刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞
ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（米国／ビデオ・アーティスト）

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞
王 仲 殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）

古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞
ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞
衞藤 瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞
ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）

イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞
チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞
ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）

独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞
樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞
林 権 澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞
李 基 文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞
スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（米国／人類学者）

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞
上田 正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞
R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

大賞
侯 孝 賢
HOU Hsiaohsien
（台湾／映画監督）

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て『悲情城市』などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞
大林 太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞
ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞
タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ヴィジュアルアーティスト）

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）

厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー（ビルマ）史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）

「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞
張 芸 謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間 守善
HOKAMA Shuzen
（日本／沖縄学者）

「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐 冰
XU Bing
（中国／アーティスト）

独創的な「為漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）

インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲 以 寧
LI Yining
（中国／経済学者）

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）

イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

大賞
任 東 権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

大賞
莫 言
MO Yan
（中国／作家）

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル文学賞受賞。

学術研究賞
シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下 武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞
アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）

臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）

関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱 銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）

深い哀洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金 德 洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）

「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）

幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）

南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）

民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
ファリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）

バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）

欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）

正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞
三木 稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）

邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
蔡 國 強
CAI Guoqiang
（中国／現代美術家）

北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回 2010

大賞
黄 秉 冀
HWANG Byung-ki
（韓国／音楽家）

韓国の伝統的楽器「伽倻琴（カヤグム）」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞
ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
（米国／政治学者・人類学者）

東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞
毛里 和子
MORI Kazuko
（日本／現代中国研究者）

アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
オン・ケンセン
ONG Keng Sen
（シンガポール／舞台芸術家）

現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第22回 2011

大賞
アン・チュリアン
ANG Choulean
（カンボジア／民族学者・クメール研究者）

「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつくったカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞
趙 東 一
CHO Dong-il
（韓国／文学者）

主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞
ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
（ドイツ／建築史家・修復建築家）

南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

第23回 2012

大賞
ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
（インド／環境哲学者）

開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞
チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
（タイ／歴史学者）

アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik
（フィリピン／映画作家・アーティスト・文化観察者）

途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
（インドネシア／宮廷舞踊家）

幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第24回 2013

大賞
中村 哲
NAKAMURA Tetsu
（日本／医師）

パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞
テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
（オーストラリア／アジア地域研究者）

民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞
ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
（インド／アーティスト）

映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞
アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
（タイ／映画作家・アーティスト）

民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第25回 2014

大賞
エズラ・F・ヴォーゲル
Ezra F. VOGEL
（米国／社会学者）

戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業経済地域（NIEs）の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞
アジュマルディ・アズラ
Azyumardi AZRA
（インドネシア／歴史学者）

イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多元的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

芸術・文化賞
ダニー・ユン
Danny YUNG
（香港／文化クリエイター）

多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第26回 2015

大賞
タン・ミン・ウー
Thant Myint-U
（ミャンマー／歴史学者）

グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞
ラーマチャンドラ・グハ
Ramachandra GUHA
（インド／歴史学者・社会学者）

民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞
ミン・ハン
Minh Hanh
（ベトナム／ファッションデザイナー）

ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

第27回 2016

大賞
A.R.ラフマーン
A. R. RAHMAN
（インド／作曲家・作詞家・歌手）

民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

学術研究賞
アンベス・R・オカンポ
Ambeth R. OCAMPO
（フィリピン／歴史学者）

著書やメディアを通した発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

芸術・文化賞
ヤスミーン・ラリ
Yasmeen LARI
（パキスタン／建築家・建築史家・人道支援活動家）

数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

第28回 2017

大賞
パースック・ポンパイチットおよびクリス・ベーカー
Pasuk PHONGPAICHIT & Chris BAKER
（タイ／経済学者）&（英国／歴史学者）

タイ社会が直面する問題を政治と経済、社会と文化など多面的に分析した共同研究は傑出しており、多大な社会貢献をしてきたタイの代表的知識人。

学術研究賞
王 名
WANG Ming
（中国／行政学者、NGO・市民社会研究者）

中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

芸術・文化賞
コン・ナイ
KONG Nay
（カンボジア／吟遊詩人、チャパイ・マスター）

内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャパイの弾き語りを現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

第29回 2018

大賞
賈 樟 柯
JIA Zhangke
（中国／映画監督）

21世紀の中国を代表する映画監督。急激に経済発展する社会的歪みの中で、苦悩しながらもしたたかに生きる若い人々を等身大に描いた作品は、世界的に高く評価されている。

学術研究賞
末廣 昭
SUEHIRO Akira
（日本／経済学者、地域研究者（タイ））

タイ経済研究を基盤として、アジア全体の工業化や経済実態を解明し、日本のアジア研究の発展に主導的な役割を果たすなど、日本におけるアジア経済研究の第一人者。

芸術・文化賞
ティージャン・バーイー
Teejan Bai
（インド／パンダワーニー奏者）

古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』に基づく歌語りのパンダワーニーの第一人者。先住民であり女性であることで二重にインド社会から差別される中で歌い続け、人々に勇気を与えている。

第30回 2019

大賞
ランドルフ・ダビッド
Randolf DAVID
（フィリピン／社会学者）

社会学者としての知見を大学、テレビ、新聞等を通じて広く市民と共有。フィリピンにおける社会的正義のために活動し、アジアの学術・文化の交流推進と相互理解の深化にも尽力した「行動する知識人」。

学術研究賞
レオナルド・ブリュッセイ
Leonard BLUSSÉ
（オランダ／歴史学者（東南アジア史専門家））

広汎な時空間を対象とする近世東アジア／東南アジア海域史を開拓し、学際的なアプローチに基づく歴史学を確立した歴史学者。その学問は、理想的な形のグローバルヒストリーとして評価されている。

芸術・文化賞
佐藤 信
SATO Makoto
（日本／劇作家、演出家）

現代的感覚と伝統的美意識を融合させた優れた舞台を数多く制作し、国内外で高く評価されている劇作家、演出家。公共劇場の芸術監督としての活動やアジアの演劇人育成にも熱心に取り組んでいる。

第31回 2021

大賞
パラグミ・サイナート
PALAGUMMI Sainath
（インド／ジャーナリスト）

グローバリゼーションに揺れるインドで、貧しい農村を訪ね、農民の声を聴き、「農民の物語」を伝える気骨のジャーナリスト。激動のアジアで、新たな「知」と市民的連帯を追求する。

学術研究賞
岸本 美緒
KISHIMOTO Mio
（日本／歴史学者）

中国明清期の社会経済史を専門とする歴史学者。日本における東洋史学の正統な継承者として、中国社会への内在的な視線とグローバルな視野で、常に斬新かつ問題提起的な研究を行う。

芸術・文化賞
プラープダー・ユン
Prabda YOON
（タイ／作家、映画作家、アーティスト）

タイを代表する作家の一人であり、評論家、脚本家等としても活躍するマルチクリエイター。タイ文学・思想の発展に寄与し、タイにおける日本理解の更新にも貢献する。

第32回 2022

大賞
林 英哲
HAYASHI Eitetsu
（日本／太鼓奏者）

創作太鼓音楽の最先端を走り続けてきた、世界的に活躍する太鼓奏者。伝統に根ざした太鼓文化を基盤としつつ、身体所作の力強さと美しさを伴う新しい舞台芸術として、太鼓の表現を飛躍的に発展させた。

学術研究賞
タイモン・スクリーチ
Timon SCREECH
（英国／美術史家）

江戸を主たるフィールドとし、広くビジュアル情報として残された歴史を解明し続ける美術史家。多元的かつグローバルな視点と斬新な方法論によって江戸研究の新たな地平を切り開いている。

芸術・文化賞
シャジア・シカンダー
Shahzia SIKANDER
（米国／アーティスト）

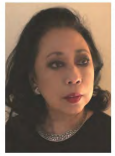
南アジアを代表するアーティスト。伝統的な細密画の世界に、最新のデジタル技術を駆使して伝統絵画を今を生きる魅力的な造形として蘇らせ、新たな芸術表現を開き続けている。

第33回 2023

大賞
トンチャイ・ウィニッチャクン
Thongchai WINICHAKUL
（タイ／歴史学者）

民主主義と市民社会の発展に貢献し、知識人の範となる歴史学者。地図の作成とその利用方法に着目した研究で、世界の人文・社会科学に大きな影響を与えた。

学術研究賞
カターリヤ・ウム
Khatharya UM
（米国／政治学者、東南アジア研究者）



移民や難民の苦境に光を当て、現代世界の課題に挑む政治学者。祖国カンボジアの悲劇の歴史を掘り下げた分析で、グローバル研究の新領域を開拓している。

芸術・文化賞
張 律（チャン・リュル）
ZHANG Lu
（中国／映画監督）

国籍・国境を越えた比類なき「東アジア映画」を製作し続ける映画監督。異文化の融和や共生のビジョンを表現した作品で、世界的に高く評価されている。